まごころ児童デイ

契約の更新と同時に介護計画の見直しをさせていただきました。
児童の現状を把握しながらご家族の意向に沿った見直しをさせていただきました。「自分で出来る事は自分でさせて欲しい、他の児童の活動に参加出来るようになって欲しい」など様々な目標に向かって少しづつではありますが、効果は感じ取れます。
これからも連絡をとりあいながら支援を続けます。ただ現時点の登録児童４８名に対する未就学児童は１割程度、来年度は１名になってしまいます。経過措置のまま３年が過ぎてしまいます。制度の改善を望むばかりです。

私が児童デイに携わる理由

私のいとこに知的障害者がいて、小学校の頃から中学校まで、ずーっと同じクラスにされていました。私は彼のことが、煩わしくて、いやでいやで逃げ出したいようなくらい時代を生きてきました。
その当時、彼に合った教育がされぬまま、授業についていけない彼は、ほとんど毎日休みました。欠席者には、その日の給食に出たパン(コッペパンみたいな丸いもの)を届けなければなりません。私は毎日彼の家に給食のパンを届けに行きました。
なぜ学校を休むのだろう。
なぜ私が同じクラスなのだろう。
彼がいるから、私がこんな役目をさせられるんだと彼を恨み、学校も恨みました。
企業に就職して、事務職をこなす日々になぜか満たされないものを感じ始めていたある日、新聞の求人広告で、引き寄せられるかのように出会った三好学園の子ども達がいました。
あれほど憎み、嫌っていたいとこの存在が、このような形で発達障害の子どもたちと出会わせてくれようとは夢にも思いませんでした。
彼らの傍にいると不思議なくらい自分が自分らしくいられるのです。「○○ちゃん今どうしてるの？」と久しぶりに会ういとことも、長い年月はかかりましたが、やっと何のわだかまりもなく話ができるようになりました。そして、何より彼がひとりで自活している姿が、私の誇りにもなりました。

（スタッフＨ・Ｍ）

ご家族の児童デイへの要望

介護計画の見直しにあたり、まごころ児童デイへのご家族の要望を再確認させていただきました。特に望まれているケアについて整理しました。次のような内容になっております。

- 集団生活に慣れてみんなと活動に参加して欲しい（54%）
- 自分で出来る事を増やして欲しい（23%）
- いけない事をしたらしかって欲しい（13%）
- 言葉をかけて欲しい（10%）

スタッフと折り紙

一宮市役所職員のボランティア研修が終って

今年も市職員の方が来てくれました。３人の方が４回にわたってミニデイと児童デイでボランティア研修されました。
みなさんいつも笑顔で楽しく利用者の方々に接して頂きましてありがとうございました。
まごころの活動のほんの一部ではありますが、少しでもＮＰＯの活動を理解していただけたらありがたいと思っております。
児童デイの研修をされた職員さんには養護学校からの送迎（福祉有償運送）からデイの活動全般を体験していただきました。
児童たちもすっかりなついてしまう程温かく接していただきました。

ミニデイだより

ちいさな秋

小春日和の午前。九品地公園を散策。
少し足が弱い方も、車いすの方も赤や黄色、緑の落葉のじゅうたんを歩いていると、まるでドラマの主人公になった様です。清々しい皆さんの笑顔にスタッフが思わず写真をパチリ。出来上がった写真を見て「きれいや。絵葉書みたいやねえ。Ｏさん若く見えるよ。秋は色がいい。後に写ってるのは一宮グランドホテルにしておこうよ」とＳさん。（実は市民病院）10歳ぐらい若く見えるとか景色が良いといい顔に写るとか・・お話がはずみ笑い声が続いていました。

11月28日起小学校の５年生20名が福祉体験で訪問。バスを乗り継いでの事で短時間でしたが手話を交えながら唄ったりと交流を深め、若いエネルギーを頂きました。Ｋさんが子供たちと先生に話したい事があるので時間を欲しいと言われ「いじめ」があるかどうかなどを質問され、Ｋさんは「今はスーパーに行ったらお菓子が買える。けどな、おじいちゃんの小学校は田舎だったからおやつは自然のもの。みかん、まきの実、キイチゴ、ヤマモモ、むくの実。育ててもらったのはおばあさんだった。けどな、いじめられることはなかった。ガキ大将だったから強い者にかかっていったかなあ。弱い者いじめはしなかった。一番いかんことは「無視する」ということ。みんな友達を大事にして絶対無視したらいかんよ」と、話されました。静かに真剣に聞いていた子供たちは大きくうなずき拍手をしました。Ｋさんはもっと子供たちに話したいことがあったのです。いろいろな経験、体験をしながら年を重ねられたＫさん。子供たちには、いじめが無くみんな仲良く幸せになって欲しいと願っておられました。
「また、来たらいいよ」別れを惜しみながら記念撮影。子供たちから元気を頂きました。

心つれづれ

言　葉

■名古屋のある会館で、何ともさわやかで心にくい言葉に出会った。それは“きれいに使って下さってありがとう”の貼り紙である。
貼られていた場所は、会館トイレの便座前の壁。普通は“きれいに使いましょう”と書いてあることが多い中、この言葉にこの会館の主の顔が見えたような気がした。

■昨今、言葉の暴力や言葉による拘束に、自らの命をたつ人が後を絶たない。新聞に、このことについて“命が大切だ”と何回言われるより“あなたが大切だ”というポスターの言葉に感動した人がいたという記事を見た。
同感である。“あなたが大切だ”といえる社会は、大切なあなたに添う支援をしていく社会ということでしょう。

■先日、モダンダンス「人属(ひとぞく)のマチエール」の公演があった。ダウン症や自閉症の若い人や子供たちとプロのダンサーが一緒に踊るというもの。この企画者でダンサーの“こかチ”さんは「福祉の一環として見ないで下さい。彼らに手を差しのべているつもりはない。彼らのダンスが素敵なんです」と。
そして、公演のチラシには《本当のことだけを表す人達に出会った。彼らは本当に素敵だ》と書かれていた。私は、この障がいにとらわれない“当たり前の言葉”にひかれて公演に出かけた。勿論、彼らのダンスは見事であり、この公演を一層輝かせていた。

■しかし、今、人と人が認め合う社会と言われながら、ハンディを持つ人達に、社会はまだ向き合えてはいない。ハンディを持つ方々が、その告知に深い悲しみを隠せないのは、乗り越えなければならない試練が尋常ではないからだ。たとえ、自身の障がいをハンディとして受け止めることが出来たとしても、《生きていくという力》を社会からもらうことは、まだ大変難しいという現実がある。
侮蔑語以前に「障がいがあるんだから、仕方がないじゃないの」という言葉を、私達は普通に使ってはいなかったか。

■言葉は、その人の人格や品格、受容や拒否を表す最も顕著なもののひとつである。
私は、一国の総理が、勝ち組や負け組という言葉を使うことの本質が、未だよく理解出来ないでいる。　（賛助会員　平田和香）

題字/澤田清敏さん